CONTENTS

元気通信　阿倍野区常盤地域から
STOP！高齢者の引きこもり
～GW期間中の取組みが大成功～ ―― ❷
居場所いろいろ　CAFE JIN（都島区）
誰もが寄りたい・働きたいカフェ
～わかりやすい福祉の入り口に～ ―― ❸
市社協　（特集）参画と協働のための地域福祉ガイドブック④
「見守り活動のちょこっとお助けブック」― ❹❺
此花区　認知症への理解とおおらかな心を持って
てへぺろキッチン
～まちがいが許されるレストラン～ ―― ❻
こんなことやってます！私たちの施設から♪
社会福祉法人 愛生会 指定障がい者支援施設 豊生園
地域に開かれた障がい者施設をめざして ―― ❽

大阪の社会福祉

2019.6
769
The social welfare in OSAKA

社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会　http://www.osaka-sishakyo.jp

平野区
買い物に困る人を救い、地域交流を促す
スマイル八百屋さん

高齢化がすすむ中で、日常のちょっとした困りごとに対する「生活支援」の取組みが各区で広がっている。区社協では生活支援コーディネーター（生活支援体制整備事業）が、地域のニーズ・特性を踏まえて、さまざまな人・団体の思いや強みをつなぎながら、こうした取組みを推進する役割を担っている。今回は平野区で始まった、移動や買い物の困りごとに対する新たな活動を紹介する。

（2・3面に続く）

▲「回覧板、掲示板をみたよ」とやってくる地域の人たち

「みなさんの協力で実現できた」と▶スマイルプラスの明野明子さん

◀HB

1時間仕事をしたら、そのうち30分は探し物をしていると友人が言う。全く同感で、年は取りたくないなと、つくづく思う▼春先に梅の木に来る鳥はと言われて、私たちはすぐにウグイスを思い浮かべる。しかし、我が家の庭先に来るのはウグイスではなくメジロ。ところが、ウグイスが刷り込まれていて、そのメジロがなかなか出てこない▼同じように、我が家の庭で思い浮かばないものに、4月の半ばに咲く白い花の名前がある。3メートルほどの木に白い花があふれるほど咲くのだが、その木の名前がいつもどうしても思い出せない。そんな時、先の友人と松江に行った▼小泉八雲の旧宅の庭に、その花が咲き乱れていて、受付のおばさんにまず尋ねたら、穏やかな声で「あれは利休梅と言います」と、欲求不満を解消してくれた。無粋ではあるけれど、帰ってすぐに木に名札をぶら下げた▼ところで松江に行ったのは、学生時代一緒にボランティア活動をしていた仲間が弱っていると、友人が知らせてくれたから。いろんなことは忘れても、こんな時に誘ってくれる仲間の温かい気持ちはいつまでも忘れない。（石）

「大阪の社会福祉」は共同募金分配金を活用して発行しています。

此花区

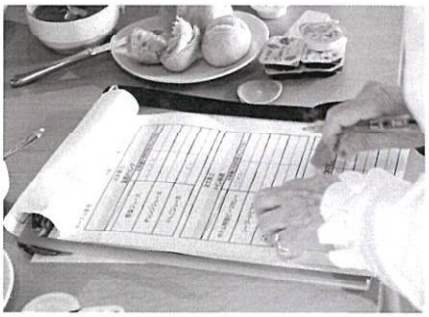
認知症への理解とおおらかな心を持って
てへぺろキッチン～まちがいが許されるレストラン～

4月5日、海辺にあるレストラン「Garden Terrace舞洲キッチン」の一画を使用し、期間限定のイベントとして「てへぺろキッチン～まちがいが許されるレストラン～」が開催された。このイベントでウェイター・ウェイトレスを務めるのは、認知症の当事者の方々。お客さんと交流することで認知症への理解を促進するとともに、さまざまな場面の対応に対して寛容な地域づくりを推進することを目的に取り組まれた。

注文を聞くと、和やかに自然と笑顔が生まれる

当事者の方々がウェイター・ウェイトレス。まちがっても○K

「てへぺろキッチン」では、認知症の当事者の方々が注文をとり、料理の提供や配膳等を担当。お客さまを席に案内し、スタッフが見守るなか、まずは水とおしぼりを提供した。シェフがつくる本格的な料理はコースになっており、食前のジュースやメインの料理が選べるので、注文を伺う必要がある。注文を書き留めるオーダー表には、てへぺろキッチンならではの一工夫。当事者の方々の負担を軽減するため、提供する順番どおりに記載し、時にはお客さん自身に直接記入してもらっている場面もあった。また、お客さんには認知症のある方に接することの少ない方に、どのようにサポートすればよいかを伝える機会とした。料理ができあがると、当事者の方々はスタッフの助けを借りながら各テーブルへ運んだ。サラダには、ドレッシングをかけるサービスも実施。料理を運ぶとお客さんから声をかけられることもあり、会話が弾んであちこちで笑顔が生まれていた。プレイベントでの練習を経て当日を迎えた当事者の方々の堂々としたウェイター・ウェイトレス姿が印象的だった。



工夫されたオーダー表

ウェイター・ウェイトレスとして活躍

当事者には生きがいを 周囲の人々には可能性を 感じてほしい

「てへぺろキッチン」の発起人は、特別養護老人ホーム ラヴィータ・ウーノ（此花区）の中川春彦さん。同じ社会福祉法人の小規模多機能型居宅介護と認知症高齢者グループホームとともにこのイベントを協働開催した。平成29年9月頃、中川さんは今回のイベントと同じ趣旨の「注文をまちがえる料理店」にSNSやネット等で情報に触れ、生き生きと働く当事者の方々の姿に感動し、大阪でも開催したいと考えた。

中川さんは「認知症になると、疾患のことばかり考える不安な毎日になりますが、このようなイベントがあれば目標ができ、生活にもハリが出ます。また、周囲の人々には、認知症であってもできることがたくさんあることを知ってほしいですね」と話し、「継続的に開催することはもちろん、他の法人との協働開催も視野に入れています」と今後の展望についても語った。今回のイベントに共催として関わった此花区社協の鹿島諒さんは「中川さんのお話を聞き、協力してくれる企業やボランティアグループをつなぐなど、主に協力者を増やす場面で相談に乗りました。今後はより多くの施設等とつながりながら、此花区全体に、てへぺろキッチンの輪を広げていきたいです」と話す。

「てへぺろキッチン」をきっかけに、認知症への理解と、おおらかな心が広がることが期待される。

次回は今年度の10月上旬に開催予定。詳しい内容は今後作成される「てへぺろキッチン」のfacebookページをご覧ください。